

『万事をプラスにする神』 エペソ人への手紙1章3～7節 2015.8.23(主日礼拝説教より)

『わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。一主の御告げ—それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。』 エレミヤ29章11節

◆田原米子さんは自殺未遂で手足を失い、初めて本当の自分を知った。神に創られ、愛され、誰とも違う特別な人生を与えられた自分だったことを！

◆「神は、みこころのままに私たちを選び、愛のうちに神の子にしようと定め…(エペソ 1:4～5)」とある。パウロも神の御心により使徒として選ばれた。私たち、一人ひとりにも神の御計画があり、神の選びがある。その神の御旨をどう受け止めれば良いのだろうか？パウロは語る『…だれが神のご計画に逆らうことができます。…形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか」と言えるでしょうか(ローマ 9:10～20)』と。田原米子さんが、星野富弘さんや水野源三さんが「どうしてこんな人生にした！」と、一生不平を呟き、生涯神を呪って生きることも出来たはず…なのに彼らは神に感謝し、賛美し、その神を証した！私たちが「神の目に高価で尊い(イザヤ 43:4)」のは、その誰とも違うオンリーワンの希少価値と、特別な使命、特別な人生が与えられているゆえである！◆神が私たちを選ばれた最大の目的は「神の子とするため(5節)」だった。「神の子」の驚くべき祝福と喜びは、あらゆる境遇で神との揺るぎない愛の交わりの中に守られ、その懐で憩い、寛ぎ、永遠の慰めの中に住むことができること。神は私たちを「御前で聖く、傷のない者にしようとされた(4節)」。放蕩息子(ルカ 15 章)を思い出そう！父を裏切り、泥と垢にまみれて帰ってきた息子に父は駆け寄り、口づけし、抱きしめたが、そのままにしておかなかった。汚れを洗い清め、真新しい服を着せ、靴を履かせ、子の特権の証である指輪をはめた。罪の奴隷だった者が、聖さを身にまとい、罪と決別してこそ神の子。◆私たちが神の子となるには、『血による贖い、罪の赦し(7 節)』が必要。贖いとは、①苦しみからの救出、②失った権利・祝福の回復である。万事を益としてくださる神を知る者(ローマ 8:28)は、失敗や過ち、この世的な不幸や災いの中でも、常に神に信頼して生きることができ、信頼して生きているうちに、万事をプラスにされる神の御業に驚き、感謝ができるようになり、この神をほめたたえる人生を歩む者とされる！